

目次

序論 平安時代後期・末期物語の主人公と先行物語〈引用〉、文化・社会

—— 諸物語展開を決定づける諸要素をめぐる検討 —— 1

I 部 『浜松中納言物語』の王朝物語史的創造考(1)

—— 男主人公と物語展開を決定づける『源氏物語』〈引用〉と言語表現・史的位相 ——

第一章 『浜松中納言物語』の〈渡唐体験〉考

—— 見聞する男主人公中納言と『源氏物語』〈引用〉 —— 11

はじめに —— 渡唐のあり方を決定づける『源氏物語』〈引用〉 —— 11

一、唐土の後宮事情と見聞する男主人公の環境における〈時代差〉 11

二、唐土の客人としての光源氏の時代〈体験〉 15

三、唐后の「本体」見聞から見出された宿縁 18

四、唐后の美質を語る価値をめぐる葛藤 22

五、〈前代のゆゑ〉の見聞という〈渡唐体験〉……………	24
おわりに代えて——唐土から日本へと展開する唐后の〈ゆゑ〉の追求——……………	25

第二章 『浜松中納言物語』 渡唐中の恋をめぐる和歌の役割考

——「みつの浜松」〈題号由来歌〉と「波の上の」詠——……………	31
---------------------------------	----

はじめに……………	31
-----------	----

一、渡唐中の恋歌の役割をめぐる問題点と研究史概観……………	31
-------------------------------	----

(1) 渡唐巻巻一における恋の歌概観……………	31
-------------------------	----

(2) 「みつの浜松」〈題号由来歌〉における〈歌の場〉の二重性……………	32
--------------------------------------	----

(3) 唐后をめぐる恋の歌概観と「波の上」詠……………	35
-----------------------------	----

二、「波の上の」詠をめぐる〈歌の場〉の人物・詠歌事情の検討……………	36
------------------------------------	----

三、「波の上の」詠における該当人物・歌意の検討……………	41
------------------------------	----

四、作品全体における〈予見する后〉詠としての役割……………	46
-------------------------------	----

おわりに——男主人公の羈旅中の恋を導く作中和歌の役割——……………	50
-----------------------------------	----

第三章 『浜松中納言物語』における大式の史的位相と役割考

——男主人公の渡唐・唐后思慕と〈女の物語〉——……………	55
------------------------------	----

はじめに——役割としての大式——……………	55
-----------------------	----

前編 『浜松中納言物語』における大式の史的位相考

一、巻二登場の大式の謎——概観と問題の所在——……………	56
------------------------------	----

二、歴史上の官位との比較から読み取れる作中のあり方……………	59
--------------------------------	----

三、他の物語との比較から読み取れる作中の意味合い……………	63
-------------------------------	----

前編小結……………	65
-----------	----

後編 『浜松中納言物語』における大式の日唐双方向の役割考

一、大式の卑下を基底とした男主人公の言いつくろい……………	72
-------------------------------	----

二、恋の〈噂〉を恐れる男主人公と筑紫／唐土……………	74
----------------------------	----

三、大式と唐土からの送使「宰相」をめぐる作品構造……………	80
-------------------------------	----

後編小結……………	84
-----------	----

おわりに——大式の日唐双方向の役割——……………85

Ⅱ部 『浜松中納言物語』の王朝物語史的創造考(2)

——男主人公帰国後の唐后思慕・〈ゆかり〉と語りの情動——

第一章 『浜松中納言物語』男主人公の言いつくろい考

——帰国後の唐后所生若君の処遇・素姓説明と語りの情動……………91

はじめに……………91

前編 若君の処遇・素姓説明をめぐる男主人公の言いつくろい考

一、若君の処遇概観と問題の所在……………92

二、帰国後の生活における若君の処遇・素姓説明の特徴……………94

三、唐后の〈ゆかり〉若君への心情……………99

四、若君を託す唐后の〈ゆかり〉選択のあり方……………103

五、吉野姫君へ若君を託す際の語りの情動……………107

前編小結……………111

後編 若君の処遇・素姓説明をめぐる作品構造考

一、巻五の兵部卿宮の吉野姫君盗み出しをめぐる問題提起と作品概観……………116

二、巻四の〈若君の母〉吉野姫君を取り巻く京の社会の思惑……………119

三、巻五の男主人公の京の生活秩序〈是正〉と若君……………121

後編小結……………123

おわりに——帰国後の若君をめぐる語らいの情動と吉野姫君——……………124

第二章 『浜松中納言物語』巻三考

——〈御前の唐語り〉と語る男主人公の唐后思慕の特質——……………127

はじめに——巻三の京・吉野の二物語系列の関連性と唐后思慕……………127

一、大將大君への語らいの変化をめぐる問題提起……………128

二、〈御前の唐語り〉以前の唐后思慕における閉塞性……………132

三、〈御前の唐語り〉で求められる唐后の語る価値……………134

四、〈御前の唐語り〉の内実と唐后思慕の変質……………136

おわりに——卷三における唐后思慕の特質と物語史的位相——	143
------------------------------	-----

第三章 『浜松中納言物語』唐后の〈ゆかり〉への援助の必然性小考

——卷三の「もし世におはすることこそとて、言づけ給ふもの……」の解釈——	149
はじめに——唐后の〈ゆかり〉に関する男主人公の心情検討の意義——	149
一、吉野山初訪問時の唐后の言付け回想をめぐる解釈の問題	150
二、聞き手の存在と「もこそ」文の検討	155
(1)唐后の言付けの相手と聞き手との兼ね合い	155
(2)「もこそ」文で示される唐后の心情と「言づけ給ふもの」の内容	158
三、「あてはかに思ひまさる」男主人公の心情検討	161
おわりに——姉妹への援助をめぐる唐后思慕の文脈と仏教的必然性——	164

Ⅲ部 『松浦宮物語』の王朝物語史的創造考

——平安最末期物語の先行物語〈引用〉と〈主人公〉をめぐる目論み(1)——

第一章 『松浦宮物語』における〈破綻〉の方法考

——『浜松中納言物語』を前提とした再構成検証——	173
はじめに——結末部における従来の〈構想破綻説〉への疑問——	173
一、『浜松中納言物語』変奏と〈構想破綻説〉をめぐる問題の所在	174
二、〈あくがるる〉恋からあやにくさを自覚した「破綻」へ	177
三、〈琴をめぐる宿世〉の構造検証	180
四、男主人公の恋における鄧皇后の統制の意味	186
おわりに	191

第二章 『松浦宮物語』の〈血の涙〉表現をめぐる作品構造考

——渡唐における『うつほ物語』〈引用〉の重なり——	199
はじめに	199
一、『うつほ物語』〈引用〉の概観・本文異同による享受の問題の所在	199
二、「血の涙」「紅の涙」等関連表現における『うつほ物語』享受	204
三、作品の特質としての孝養と恋の重なり方	210

Ⅳ部『有明の別れ』の王朝物語史的創造考

——平安最末期物語の先行物語〈引用〉と〈主人公〉をめぐる目論み(2)——

第一章『有明の別れ』における男装の姫君の〈笛の別れ〉考

——『古とりかへばや』・『今とりかへばや』〈引用〉をめぐる物語史的位相——……………221

はじめに——男装の姫君の三物語における〈笛の別れ〉場面——……………221

『前編 〈笛の別れ〉』をめぐる作品全体と男装時の『今とりかへばや』〈引用〉考

一、男装の物語展開全体における『今とりかへばや』〈引用〉概観……………223

二、男装への心情と〈笛の別れ〉をめぐる『今とりかへばや』〈引用〉概観……………226

三、〈笛の別れ〉諸場面における『今とりかへばや』との対応概観……………229

四、〈笛の別れ〉場面比較(1)心強き／心細き心情の対照性……………232

五、〈笛の別れ〉場面比較(2)公的な披露時の言動・心情と〈天女性喪失〉……………235

前編小結……………238

『後編 男装解除後の〈笛の別れ〉』における『古とりかへばや』〈引用〉考

一、男装解除後の「笛竹」歌の『古とりかへばや』歌との近似性……………244

二、〈笛の別れ〉諸場面における『古とりかへばや』〈引用〉……………246

三、三物語の〈笛の別れ〉変容——『とりかへばや』両本の対応場面から——……………248

後編小結……………250

おわりに——『有明の別れ』の〈笛の別れ〉の文学史的位相——……………251

第二章『有明の別れ』の笙の笛考

——楽の奇瑞と成立期の神仙譚愛好との関連から——……………257

はじめに——超常的な〈笛〉の種類をめぐる問題提起——……………257

一、女右大将の笙の笛をめぐる諸背景検討……………261

(1)物語文学史における笙の笛……………261

(2)記録類にみられる笙の笛……………263

二、「なにがしの月影に山に上りける人」と笙の笛の神仙譚……………264

三、三位中将の笙の笛をめぐる以後の展開検討	269
(1)三位中将と〈右大将おはせぬ嘆き〉	269
(2)笙の笛と〈左大将の族〉	272
おわりに——今後の課題	275
【補論】『有明の別れ』巻一の「なにがしの月影に山に上りける人」再考	283
第三章 『有明の別れ』における〈主人公〉の出生の秘密考	
——『源氏物語』の叙述方法〈引用〉による作品後半の構造	289
はじめに	289
一、〈左大臣が出生の秘密を知るまでの物語展開〉の問題の所在	289
二、巻二の役割——作品前半の後日譚における〈後継主人公を騙る〉構造	294
三、巻二から巻三へ——〈類例〉異父妹中宮への出生告白における転換点	297
四、巻三の役割——〈光〉の継承者東宮よりも、 ^ゝ 貶め ^ゝ られる左大臣	300
おわりに——結論に代えて	303
第四章 『有明の別れ』における『狭衣物語』〈引用〉試考	
——〈主人公〉をめぐる作品後半の問題提起	311
はじめに	311
一、『狭衣物語』〈引用〉をめぐる構造と問題点概観	311
二、巻三末尾近くの東宮の嵯峨行啓検討	316
三、巻二はじめの左大臣の愛執と好色検討(1)——〈引用〉要素の概観	322
四、巻二はじめの左大臣の愛執と好色検討(2)——出生の秘密との兼ね合い方	326
五、〈主人公〉をめぐる装置としての『狭衣物語』〈引用〉	330
おわりに	332
第五章 『有明の別れ』の〈末尾歌〉試考	
——本文校訂・歌意、作品内容との関わりをめぐって	339
はじめに	339
一、校訂本文の確定	340
二、歌ことば「思ひ入る(野)」の検討	343

三、「思ひ入る」物語和歌との比較からみた性格	347
四、歌ことば「野寺」の検討	350
五、慈円の「有明の」歌との関連性検討	352
六、慈円の「有明の」歌撰取で想定される意図	355
おわりに——〈末尾歌〉の歌意・意図をめぐる可能性——	360
結論 平安時代後期・末期物語の主人公を規定する諸要素	369
初出一覧	379
あとがき	383
作品本文重要語句・関連記述索引	001 ⑤

序論 平安時代後期・末期物語の主人公と先行物語〈引用〉、文化・社会

—— 諸物語展開を決定づける諸要素をめぐる検討 ——

『源氏物語』以後、平安時代後期の十一世紀後半成立、及び平安時代末期（鎌倉時代初期も含む）の十二世紀成立の王朝物語を決定づける要因として、各成立期の社会制度・慣習・思想と共に、文化の諸要素——中でも『源氏物語』その他の先行物語や説話・諸詩歌の〈引用〉や関連イメージ、その時々々の言語意識、及び音楽などの才芸——が注目される。それも、先行物語の各作品それぞれの進行パターンに関する踏まえ方・組み合わせ方、登場人物の言動・心情及び関係叙述における細部の特徴が、各作品全体の構造や物語展開を決定づけ、先行物語の単なる模倣に留まらない作品独自の魅力をもたらしているものと考えられる。

本書では、平安時代後期物語『浜松中納言物語』、及び平安時代最末期物語『松浦宮物語』・『有明の別れ』（唯一の伝本天理図書館蔵本のうち巻一・巻三の外題表記「在明の別」、巻二の外題表記「有明の別」）＝本書Ⅳ部第一章冒頭掲出内容を論の対象として、各題材による物語展開・作品構造を決定づける諸要因について考察する。その際、物語展開・作品構造を大きく決定づける存在として、とりわけ作品の中心で活躍するいわゆる主人公の言動・心情と先行物語〈引用〉を主に論じていく。

先行物語〈引用〉については、平安後期物語の『浜松中納言物語』の渡唐と帰国をめぐる構造においてとりわけ『源氏物語』の成立時期とそれ以前の時期に対するそれぞれの引用二種類のあり方が注目される。更に作中和歌や登場人物に関する社会的なあり方も関わって物語展開を決定づけているものであろう。また、平安最末期（または鎌倉

初期）物語になると、先行物語〈引用〉の比重は更に大きくなっているのではないか。『松浦宮物語』における渡唐・転生・秘琴伝授と『有明の別れ』の男装・楽の奇瑞・出生の秘密など、それぞれの多彩な物語展開の根本には、先行物語に対する成立当時の貴族社会の読者による深い理解を前提としたさまざまな先行物語〈引用〉のあり方が繰り広げられているものと考えられるのである。それも、『松浦宮物語』が『浜松中納言物語』を前提としている場合のように、〈引用〉のそれぞれが断片的・羅列的ではなく、一定の論理を以て行われているであろう。

そうした先行物語〈引用〉の元で、物語展開の中心で活躍するいわゆる主人公のあり方にしても、言動・心情の特徴から物語展開の重要な要因を見出せる。『浜松中納言物語』の主人公中納言においては、渡唐時の唐后への恋が日本帰国後の生活において後の〈ゆかり〉である隠し子若君や異父妹吉野姫君をめぐる言動・心情へとつながり、物語展開を進めていく要因となる。ここでは、この作品が宿世・予言により専ら主人公の言動が制約されていくと見る従来のとらえ方とは異なるあり方が見出せるのではないか。作品本文における関係部分の検討の際、過剰なまでの言動・心情及び予言などの描写においては難解な文章が多く、基本的な文意の検討が不可欠であろう。その一方で、平安最末期『松浦宮物語』『有明の別れ』の〈主人公〉については従来、心情描写及びその自律性の〈乏しさ〉が指摘されており、作品自体の低評価にもつながっているよう。ただし、前述のように先行物語〈引用〉のあり方が成立当時の読者による内容周知が前提とされているならば、作品理解のあり方、とりわけ作品と主人公をめぐる意図も新たに見出せるのではないか。『松浦宮物語』の主人公橘氏忠は、物語展開の激しい起伏に比して心情の自律性の〈乏しさ〉が指摘されているが、先行物語〈引用〉と描き出される状況との関わりで再検討の余地がある。また、『有明の別れ』の〈主人公〉は、作品前半の女右大将は異性装の物語展開、女右大将の男装解除後となる作品後半の左大臣や東宮は女右大将の男装時に生じた出生の秘密をめぐる物語展開を担っているが、言動・心情のあり方も前述の先行物語〈引用〉の前提による読み解きにより、作品の新たな姿が見出せよう。こちらも、唯一の伝本天理図書館本文の再

検証が不可欠である。

以上のように、先行物語〈引用〉や主人公をめぐる作品のとらえ方は、作品細部の検討による再検証を行いつつ、新たに見直していく必要がある。

そこで、各作品毎にこうした問題意識の元で、論考の構成を四部に分ち論じていく。Ⅰ部とⅡ部では『浜松中納言物語』の諸問題を扱い、Ⅰ部において渡唐と帰国、主人公の思慕する唐后転生予示に至る物語展開を決定づける諸要素を検討し、Ⅱ部において帰国後の物語展開を決定づけるものとして唐后の〈ゆかり〉に対する主人公の言動・心情のあり方をそれぞれ検討する。また、Ⅲ部では『松浦宮物語』の渡唐と転生、楽の奇瑞の諸物語展開において、『浜松中納言物語』を中心に、『源氏物語』など他の先行物語を踏まえた作品構造、Ⅳ部では、『有明の別れ』の異性装と出生の秘密、恋の垣間見と隠れ蓑の術、楽の奇瑞をめぐる物語展開において、『とりかへばや』『源氏物語』『狭衣物語』等を踏まえた作品構造をそれぞれ論じている。

Ⅰ部（全三章）・Ⅱ部（全三章）・Ⅲ部（全二章）・Ⅳ部（全五章）各論の趣旨は次の通りである。

Ⅰ部 『浜松中納言物語』の王朝物語史的創造考(Ⅰ)―男主人公と物語展開を決定づける『源氏物語』〈引用〉と言語表現・史的位相―では、男主人公中納言の父宮転生・唐后思慕をめぐる渡唐及び帰国後の諸物語展開のあり方を決定づける諸要素を確認する。該当する諸要素として、先行物語の中でも最も影響を与えている『源氏物語』〈引用〉及び作中人物の身分・官位・職掌をめぐる時代的位相、また特に渡唐中に詠まれた作中和歌のあり方が、中納言の渡唐・帰国及び唐后の転生予示までに至る物語展開の根底を形作っている様相を作品本文解釈の検討も交え考察していく。

第一章 『浜松中納言物語』の〈渡唐体験〉考―見聞する男主人公中納言と『源氏物語』〈引用〉―では、作品の全

体構造の総論として在唐時次いで帰国後に見聞する男主人公中納言の立場について取り上げ、見聞対象となる唐土及び思慕の対象唐后の人生のあり方における落差を、『源氏物語』引用などとの関連から確認する。

第二章 『浜松中納言物語』 渡唐中の恋をめぐる和歌の役割考——「みつの浜松」〈題号由来歌〉と「波の上の」詠——では、巻一在唐時の男主人公中納言の恋に関わる作中和歌、具体的には中納言の「みつの浜松」〈題号由来歌〉及び思慕の対象である唐后の「波の上の」詠が、男主人公が渡唐から帰国へ向かう物語展開の各局面を映し出す重要な役割を重層的に果たしていることを論じる。唐后の「波の上の」詠については、和歌直前の難解な文章や和歌の歌語と修辭の再検討により文・歌の解釈を定めた上で、「みつの浜松」〈題号由来歌〉で既に窺い得る、男主人公中納言の渡唐と恋のあり方との兼ね合いについても論及する。

第三章 『浜松中納言物語』における大式の史的位相と役割考——男主人公の渡唐・唐后思慕と〈女の物語〉——においては、論を前編と後編に分ち、従来は作中で一見単なる脇役に過ぎないかのようにみなされてきた、大宰府の實質的な長である大宰大式の人物設定と役割のあり方を論じる。この大式が果たす役割の重要性は、作品における男主人公の渡唐中の恋物語の後日譚、及び渡唐前の逢瀬ゆえ出産・剃髪した女君大將大君の幸福な生き方を問題にしたいわゆる〈女の生き方の物語〉の双方に及ぶことを論じるものである。前編 『浜松中納言物語』における大式の史的位相考で、作中の登場人物大宰大式が帰国直後の男主人公中納言に自身の娘を献じる言動などにおける『源氏物語』の明石入道・明石の君父娘〈引用〉のあり方と、九州を統括する實質的な長としての社会的地位における史の変遷との兼ね合いを検証し、作品の史的位相について論じる。また、後編 『浜松中納言物語』における大式の日唐双方の役割考で、中納言の帰国と唐后思慕、剃髪した大將大君との〈結婚〉生活をめぐる物語展開に対して大式が果たす役割について、彼の娘関連・自身の職務関連の両面から論じる。

一方、Ⅱ部 『浜松中納言物語』の王朝物語史的創造考(2)——男主人公帰国後の唐后思慕・〈ゆかり〉と語りの情動——では、巻二以降の男主人公中納言帰国後における唐后を偲ばせる〈ゆかり〉、后との隠し子の若君と異父妹吉野姫君をめぐる言動・心情について、物語展開を動かしていく要因として検討していく。中納言の言動が一見前世からの宿世あるいは仏の託宣に導かれて専ら受け身となつてばかりいるように従来とらえられてきた物語展開の自律的な〈論理〉について検討し、作品の再評価を行う。

第一章 『浜松中納言物語』 男主人公の言いつくろい考——帰国後の唐后所生若君の処遇・素姓説明と語りの情動——では、帰国後の中納言による唐后所生の隠し子若君の素姓説明と処遇をめぐり、中納言の京の日常生活と唐后を恋い偲ぶ〈ゆかり〉吉野姫君との兼ね合いを明らかにする。論を前編と後編に分ち、前編 若君の処遇・素姓説明をめぐる男主人公の言いつくろい考で、若君の素姓説明と処遇を曖昧にし続ける中納言の言動・心情の内訳を検討し、後の異父妹吉野姫君へ語り託す心情のあり方を明らかにする。また、これによって吉野姫君が置かれた状況について、後編 若君の処遇・素姓説明をめぐる作品構造考で、京の日常生活での立場と作品全体における意味合いを検討し、最終巻巻五の式部卿宮による後の異父妹吉野姫君盗み出しへ至る必然性について論じる。

第二章 『浜松中納言物語』 卷三考——〈御前の唐語り〉と語る男主人公の唐后思慕の特質——では、男主人公中納言の唐后思慕の転機として、巻三半ばにおいて帝の面前で唐后のことを公的に語るあり方について考察する。その語りの特徴と唐后思慕に関わる物語展開上の意味合いを明らかにする。

第三章 『浜松中納言物語』 唐后の〈ゆかり〉への援助の必然性小考——卷三の「もし世におはすることこそとて、言づけ給ふもの……」の解釈——では、男主人公中納言の唐后思慕に伴う〈ゆかり〉の異父妹吉野姫君への援助と、父宮転生に伴う仏教論理との関係性をめぐる問題について、関連箇所本文意検討を手掛かりに行う。巻三で中納言が唐后の母尼君・異父妹吉野姫君のいる吉野山への初回訪問で難解な箇所について、各語意を検討し改めて解釈を示した

上で、物語展開全体において唐后の〈ゆかり〉吉野姫君を援助する宿世が、唐后思慕と后の〈ゆかり〉としての吉野姫君に対する心情との関連において論じる。

次に、Ⅲ部『松浦宮物語』の王朝物語史的創造考―平安最末期物語の先行物語〈引用〉と〈主人公〉をめぐる目論み(1)―では、従来は評価が芳しくなかったいわゆる擬古物語のうち『松浦宮物語』を取り上げ、先行物語〈引用〉、とりわけ『浜松中納言物語』または『うつほ物語』との関わりから生じる作品構造について検証し、平安最末期物語としての創作方法と文学史的位相を考える。

第一章『松浦宮物語』における〈破綻〉の方法考―『浜松中納言物語』を前提とした再構成検証―では、作品の総論として、物語展開の最後が帰国後の場面で男主人公橘氏忠と女君たちの〈不和〉などの叙述で簡潔に締め括られており、作品の〈破綻〉とみなされがちな問題点について、それまでの物語展開を『浜松中納言物語』を中心とした諸先行物語の引用からの流れとしてとらえた上で結末のあり方を論じる。

第二章『松浦宮物語』の〈血の涙〉表現をめぐる作品構造考―渡唐における『うつほ物語』〈引用〉の重なり―では、作品において異なる主題考養と恋の各物語展開を描く方法として、「血の涙」表現をとりあげ、始発部の男主人公の渡唐時で主になぞられている先行物語『うつほ物語』〈引用〉のあり方を見出ししている。

最後に、Ⅳ部『有明の別れ』の王朝物語史的創造考―平安最末期物語の先行物語〈引用〉と〈主人公〉をめぐる目論み(2)―では、『松浦宮物語』と同時期の院政期最末期成立と推定されている『有明の別れ』の創作方法と文学史的位相を、先行物語〈引用〉及び時代の文化的傾向から考える。

第一章『有明の別れ』における男装の姫君の〈笛の別れ〉考―『古とりかへばや』・『今とりかへばや』〈引用〉を

めぐる物語史的位相―では、主に作品前半の基本となる考察として、論を前編と後編に分ち、「有明の別れ」における先行物語〈引用〉の観点から男装の姫君の三物語における物語史的位相を検討する。前編〈笛の別れ〉をめぐる作品全体と男装時の『今とりかへばや』〈引用〉考で現存『今とりかへばや』の物語展開と男装の女主人公の心情を踏まえたあり方を論じた上で、異性装の先行物語〈引用〉の検討から男装の姫君が女装となる前後に笛の奏を行う場面の意味合いについて論じ、後編 男装解除後の〈笛の別れ〉における『古とりかへばや』〈引用〉考で、和歌や場面状況の趣向面における散逸『古とりかへばや』の〈引用〉を現存『今とりかへばや』の対応場面との兼ね合いで物語史的な位相を論じる。

第二章『有明の別れ』の笙の笛考―楽の奇瑞と成立期の神仙譚愛好との関連から―では、第一章を受けて『有明の別れ』独自の特徴を考察する。『狭衣物語』や『今とりかへばや』における横笛による奏を踏まえながら、笙の笛による奏を新たな趣向として描いた点に成立期の学芸的・思想的な傾向を明らかにしつつ、作品における新たな物語展開を見出す。また、その際に典拠またはそれに類する言及例として考察した箇所解釈について、本章末尾の【補論】『有明の別れ』巻一の「なにがしの月影に山に上りける人」再考で検討を行った。

第三章『有明の別れ』における〈男主人公〉の出生の秘密考―『源氏物語』の叙述方法〈引用〉による作品後半の構造―では、作品後半において先行物語の叙述方法の応用により描かれる出生の秘密の物語展開、及び作品の中心に描かれるいわば〈主人公〉をめぐる物語史的位相とそこから見出される特性について考察する。出生の秘密の物語展開において中心的な登場人物の一人である左大臣が、作品前半における男装の女主人公の子として描かれる文脈の意味合いに関し、主に『源氏物語』の叙述方法〈引用〉を手掛かりにして検討する。

第四章『有明の別れ』における『狭衣物語』〈引用〉試考―〈主人公〉をめぐる作品後半の問題提起―では、従来それほど注目されてこなかった『狭衣物語』の〈引用〉の重要性を本作品のとりわけ後半において考察する。これは、

前章第三章で論じていた『源氏物語』〈引用〉との兼ね合いも含めた作品全体の構造と〈主人公〉のあり方を論じたものである。

第五章 『有明の別れ』の〈末尾歌〉試考―本文校訂・歌意、作品内容との関わりをめぐって―では、院政期末期成立物語である本作品における結末のあり方を考える。作品唯一の伝本天理図書館蔵本には、作品本文の物語部分の後に〈末尾歌〉と仮に呼ぶ和歌が書かれており、その和歌の本文校訂や作品本文との関わりについては見解が従来分かれている。本文校訂と共に歌ことばの特徴についての検討を通し、〈末尾歌〉と作品成立期の新古今歌壇期及び作品本文との関わりについて、本歌取りの可能性を含めて考える。

以上の諸論考を通じて、『源氏物語』以後の王朝物語の再評価を試み、〈主人公〉と先行物語〈引用〉、文化・社会をめぐる物語史的創造の魅力的な内訳を提示したい。

なお、諸論考中の引用本文の出典については、各論考の注欄にその都度記す。

I 部 『浜松中納言物語』の王朝物語史的創造考(1)

――男主人公と物語展開を決定づける

『源氏物語』〈引用〉と言語表現・史的位相――